

## タイ人作家シーブーラパーの初期言論活動 —— 1929年から1932年立憲革命前まで ——

宇戸 優美子

### はじめに

タイの近代文学は19世紀末に西欧小説の模倣から始まった。その発展に大きく貢献した人物にシーブーラパー Siburapha (本名はクラブ・サーイプラディット Kulap Saipradit, 1905-74) という作家がいる。1920年代末、それまでの韻文主体の宮廷文学に代わり、娯楽性を有しつつも支配階層の古い価値観を否定する大衆的な作品が出現した。王族や貴族の主人公による荒唐無稽な冒険物語や恋愛物語ではなく、現実社会に蔓延する格差や不平等、婚姻制度に見られる古い価値観に対する批判が外来の小説形式を通して表現され始めたのである。

シーブーラパーが中心となって結成した若手作家集団「スパーブ・ブルット」Suphap Burut (紳士) は、1929年に同名の文芸誌『スパーブ・ブルット』*Suphap Burut* (1929-30) を刊行した。この雑誌は多くの発行部数を記録し、後にタイ文芸界で活躍する作家を多数輩出したことで知られる。彼らの作品は、新時代を象徴するモダンな小説として、恋愛観、結婚観、服装、髪型、映画鑑賞などの風俗文化まで、様々な面で読者の近代意識を醸成する役割を果たした。

1929年世界恐慌の影響はタイにも及び、国家財政の急激な悪化と相まって絶対王制への不満が高まり、1932年立憲革命に向けた動きを見せていた。巷では西欧的な政治体制や自由平等の思潮が公然と語られ始め、新旧の価値観の狭間に陥る中、文学においても従来のタイ文学にはなかった西欧的な思想、価値観が大胆に表象されるようになった。印刷技術の普及により新聞・雑誌の発行が飛躍的に増加すると、販売促進のために新聞小説が登場し、商品としての小説の価値が認識される時代になった<sup>(1)</sup>。こうした価値観の大転換期を迎えていた時代に、若い作家たちが集い、新たな思想を武器として旧来の価値観に対抗する言論活動を行ったのはある意味で歴史的必然であった。

1930年11月に文芸誌『スパーブ・ブルット』が休刊になると、シーブーラパーは次に新聞編集の道へ向かった。彼が関わった新聞は、『バンコク・カーンムアン』*Bangkok Kanmueang* (政界バンコク)、『タイ・マイ』*Thai Mai* (新タイ)、『プー・ナム』*Phu Nam* (指導者)、『サヤーム・ラート』*Sayam Rat* (シャム国民) などで、主に担当したのは政治・社会評論の執筆であった。ところが1931年末、『タイ・マイ』紙に掲載した論説「人間の権利」Manutsayaphapが絶対王制批判であるとされ、辞職をやむなくされてしまった。さらに1932年1月には『シー・クルン』*Si Krung* (王都) 紙に再掲載した「人間の権利」によって新聞そのものが停刊処分を受ける結果となった。

新聞を通じての啓蒙思想の普及の道を閉ざされたシーブーラパーは、再び小説という手段で自己の思想を訴える道に戻り、1932年立憲革命（6月24日）の直前に長編小説『人生の闘い』 *Songkhram Chiwit* を発表した。これは、若い男女の悲恋物語の中に、古い身分意識や貧困を生み出すいびつな社会への批判を忍ばせた作品で、そこには作者がその後も繰り返し主要テーマに掲げたヒューマンイズムの思想が色濃く見られる。『人生の闘い』は、初期シーブーラパー作品の代表作の一つである。なおこの作品は、後に指摘するようにドストエフスキー Fëdor M. Dostoevskij (1821-81) の『貧しき人びと』 *Bednye Lyudi* (1846) のプロットを下敷きにしたものである<sup>2)</sup>。

シーブーラパーは小説、論説、その他の著作において、上からの近代化への対抗軸として市民階層による社会変革を唱え、同時代や後世の知識人に大きな影響を与えた近代タイの代表的知識人である [Wyatt 1982; トリーシン 1985; Smyth ed. 1987; 吉岡 1993]。本稿の目的は、当時の若手作家たちのリーダー的存在であったシーブーラパーによる立憲革命以前の初期小説と新聞論説の分析を通して、初期言説に見る彼の思想と、若手作家たちが依って立とうとした当時の新思潮の一端を明らかにすることである。

## 1. 先行研究

日本におけるシーブーラパー研究は翻訳に付随する解説が主で、初期作品にせよ後期作品にせよ、本格的な研究はまだない。作品翻訳としては、1981年に松山納<sup>おさむ</sup>が短編「結婚までの日々」 *Kon Taengnan* (1927年。邦訳は新日本出版社、解説なし) を、そして安藤浩が長編『未来を見つめて』 *Lae Pai Khang Na* (第1部少年期1955年、第2部青年期1957年。邦訳は井村文化事業社/勁草書房) を邦訳したのが最初で、その後1982年に小野沢正喜・小野沢ニッタヤーが共訳で長編『絵の裏』 *Khang Lang Phap* (1937年。邦訳は九州大学出版会)<sup>3)</sup> を、2008年に宇戸清治が作品集『罪との闘い』 *Pachon Bap* (1934年。邦訳は大同生命国際文化基金) を出版している。

小野沢は『絵の裏』の解説で、シーブーラパーの初期作品を理想追求のととらえ、主人公に新興エリート層を配置することで近代化に対する作者の肯定的、楽観的な立場を示していると述べた。シーブーラパーをアーカートダムクーン・ラピーパット殿下 *Akat-damkoeng Raphiphat* (1905-32) やドークマーイソット *Dokmaisot* (1905-63)<sup>4)</sup> といった上流階層に属する保守的な同時代作家と比較することで、門閥によらず才能と努力によって立身出世を果たす新興エリート層の希望を前面に打ち出した小説であったと評価している [小野沢共訳 1982:233-38]。タイ文学史研究において、以下の3つの作品が相次いで発表された1920年代末は、タイ近代小説の成立の時であるという認識が共有されてきた。シーブーラパーの『快男児』 *Luk Phuchai* (1928)、アーカートダムクーン・ラピーパット殿下の『人生劇』 (1929)、ドークマーイソットの『彼女の敵』 (1929) である。多くの研究者が

これら3作品の登場をもってタイ独自の近代小説の成立とみなしている [Wyatt 1982:239; 小野沢共訳 1982:233; トリーシン 1985:20-23; Smyth ed. 1987:173; 吉岡 1993:26-27]。

一方、タイにおけるシーブーラパー作品の評価はイデオロギーの部分に焦点を絞る傾向があり、個別作品の研究は意外と少ない。これは軍部独裁時代を通じて発禁処分を受けていた彼の著述が1973年の学生による民主革命を機に再発掘され、ようやく自由に彼の思想に触れられるようになったことと無関係ではない。当時はシーブーラパーと並んで反体制詩人であり、同様に発禁処分に遭っていたナーイ・ピー Nai Phi (1918-87) や社会主義者チット・プーミサック Chit Phumisak (1930-66) の社会変革思想に人々の強い関心が向いていた。その意味では文芸誌編集者のスチャート・サワツシー Suchat Sawatsi (1945-) <sup>(5)</sup> が主宰した文芸誌『本の世界』 *Lok Nangsoe* (1977-83) <sup>(6)</sup> の1978年11月号にシーブーラパー特集が掲載されたのが、タイにおける本格的なシーブーラパー研究の始まりと言える。

その後にシーブーラパー作品の再版ブームが続いたことで、彼の小説や評論が初めて広く知られるようになり、学術研究の対象になる機会が増えた。中でも、チュラーロンコーン大学文学部教授のトリーシン・ブンカチョーン Trisin Bunkachon (1952-) や前述のスチャートはシーブーラパーに関する論考を多数発表し、シーブーラパー作品の再刊行や関連書籍出版の際に編集をつとめることが多い。今日シーブーラパーが「タイ近代文学の父」Si Haeng Wannakam Thai と呼ばれるようになったのは、これら研究者、編集者の力による部分が大きい。ただし、シーブーラパーの実践的活動やその思想の歴史的評価を除いた、前期、後期を問わない個別作品の研究は深められておらず、今後の本格的な作品研究が待たれる。

文芸誌『スパープ・ブルット』に関する研究に絞れば、主宰者としてのシーブーラパーの役割を述べたものや、各作家の経歴紹介、活動背景についての言及が多くを占める。例えば、文芸評論家のサティエン・チャンティマートン Sathian Chanthimathon (1943-) は、「メンバーのほとんどは新しい学制のもとで教育を受けた一般庶民だった。彼らがグループの結成に踏み切った理由は、ジャーナリストや職業作家になりたかったからである。彼らが発行した『スパープ・ブルット』は当時の読者に一大旋風を巻き起こした」 [サティエン 1987:43] と述べるにとどまり、作品研究には踏み込んでいない。また、「創刊号、第2号ともに3,000部を完売し、その後の号では4,000部を発行した」 [Udom 1979:88; Prakat 1988:18] のように発行部数を強調した先行研究もある。

『スパープ・ブルット』の活動理念や雑誌発行に関して上述のサティエンは、「文学界の流れに画期的な方向転換をもたらした原動力に等しい。それはまさに新しい時代、新しい小説の時代を切り開いた力といえる」 [サティエン 1987:89] と述べている。さらにスチャートは、彼らが職業作家の経済的自立、社会的認知を目指したこと、言論の自由や人道主義といった西欧近代思想の普及に貢献したことを指摘し、「当時のタイ人には馴染みの薄かった新思潮を普及させると同時に、職業としての執筆活動の確立を促した点で、その後の

作家集団にも影響を及ぼした」[Suchat ed. 2010:59, 101, 引用者訳]と述べている。

一方、タイ社会思想研究者の杉山晶子は、この雑誌を新聞発行活動の延長線上に位置づけている。1920年代はタイ字紙の創刊が急速に活発化した時代であり<sup>(7)</sup>、読者拡大のための工夫として編集のスタイルが変化する過程を経て、短編小説が中心の文芸誌が発行されたと指摘し、「それまで政府の広告、日々のニュースが中心であった新聞に娯楽読み物の欄が加わった。(中略) 同時期において、恋愛などを題材とした小説が掲載され始めている」[杉山 2000:60, 62-63]と述べている。

以上で見た通り、『スパープ・ブルット』に関する先行研究では、活動理念や文学史上の意義に重点が置かれたために、個別の作品に関する分析が不足していたことは明らかである。しかし筆者は、この文芸誌に掲載された作品の内容分析を通じて西欧の文化や価値観がどのように表象されていたかを知ることが、当時の都市中間層の価値意識を考察するためにきわめて重要であると考えられる。

## 2. シーブーラパーの経歴と作品

ここではまず作家としてのシーブーラパーの全体像を捉えるために、その経歴と代表的な作品について概観しておきたい。初期の時代よりずっと後までの作品についても必要最小限度記述することになるが、本稿自体の目的はあくまでも『スパープ・ブルット』時代から立憲革命の年の1932年までの作品を扱うものであることをあらかじめ断っておく。なお経歴に関しては、邦訳された『絵の裏』、『罪との闘い』の解説、そして『自由の人、善き人、すなわちシーブーラパー』[Trisin ed. 2005]、『青年のためのシーブーラパー史』[Chaimaiphon 2005]、『クラブ・サーイプラディットの道のり —— シーブーラパーの人生をひもとく』[Phailin ed. 2006]に主として依拠した。

### 2.1. 文筆家としての闘い

本名クラブ・サーイプラディット。シーブーラパー<sup>(8)</sup>という筆名を主に用いていたが、他にもイッサラチャン Itsarachon (自由民)、ウバーソック Ubasok (清信士)<sup>(9)</sup>、ドークパトウム Dok Pathum (蓮の花)、チューンチャイ Chuen Chai (爽悦)、ナーイ・テーププリーチャー Nai Thep Pricha (知恵の天人)などの筆名を持っていた。近代化が進められたラーマ五世 Rama V (在位 1868-1910) 時代末期の1905年3月31日、首都バンコクに生まれた。タイ国有鉄道の下級官吏だった父は彼が6歳の時に死去し、小さな裁縫店を営む母親に育てられた。姉は歌手として舞台に立ち、母を支えた。シーブーラパーはテープシリシ Thepsirin 校<sup>(10)</sup>で学び、在学中からアーカートダムクーン・ラピーパット殿下らと文芸活動を始めた<sup>(11)</sup>。

卒業後の1925年頃から『セーナスクサー・レ・ペーウィッタヤーサート』*Sena Sueksa Lae Phae Witthayasat* (軍事研究と科学普及) 新聞社で編集補助の職に就き、同時に夜間学

校で英語の教鞭を執った。校長のブントゥーム・カモンチャン Buntoem Kamonchan から、「シーブーラパー」の筆名を使うよう助言を受けたのもこの時期である。その後地区局の通訳補佐となったが、階層意識や派閥主義からくる差別を嫌い離職した。1929年、若手作家集団「スパープ・ブルット」を結成し、主筆かつ編集責任者として文芸誌『スパープ・ブルット』を発行した。執筆、原稿受理、編集、校正、印刷所への送付、販売店からの代金回収などをほぼすべて彼一人で行った。

1930年代からは、『バンコク・カーンムアン』、『タイ・マイ』、『プー・ナム』、『サヤーム・ラート』の各新聞の編集に携わるようになった。1932年の初めに『シー・クルン』紙に掲載した論説「人間の権利」が反体制的であるとされ、発行停止処分を受けた。1932年6月の立憲革命の際、人民党への入党を勧められたが、在野の言論界で生きるという信念を貫きその勧めを断った。その後、革命推進派だったワンワイタヤコーン殿下 Wan-waithayakon (1891-1976)<sup>(12)</sup>を社主とする日刊紙『プラチャーチャート』Prachachat (国民)の編集長となった。しかし、プレーク・ピブンソングラム元帥 Plaek Phibunsongkhram (1897-1964)<sup>(13)</sup>が権力を掌握すると、民主主義と社会的公平を訴えた同紙は発行停止を命ぜられた。

短期の出家とチャニット Chanit Saipradit (1913-2010)<sup>(14)</sup>との結婚に続く1935-36年には、朝日新聞社の招待で日本の新聞の実情を視察するために訪日し、半年間滞在した。帰国後しばらくは無職だったが、その後1939年に『スパープ・ブルット・プラチャーミット』Suphap Burut Phrachamit (紳士と国民の友)という日刊紙を創刊した。さらにピブン政権下では、首相の権力掌握と日本の侵略行為に反対して政治的中立の論陣を張ったため、1941年に国内反乱罪で初めての逮捕を経験した。3ヶ月にわたり投獄されたが、証拠不十分で釈放された。戦時下の1942年に摂政プリディー・パノムヨン Pridi Phanomyong (1900-83)の指揮下で抗日組織「自由タイ」Seri Thai が結成されると、シーブーラパーは言論面でこれを支援した。この時期は、数編の短編を除いて小説の創作はほとんど行っていない。1943-46年の間はタイ新聞協会会長をつとめている。第二次世界大戦終結後、タイと中国の連帯を訴える論陣を張り、タイ国内の華僑系新聞社スタッフの逮捕に反対したが、厳しい言論統制に遭った。

タイでの言論活動に限界を感じ、外の世界からもう一度自己とタイ社会を相対化して見つめる必要性を感じたシーブーラパーは、1947-48年の間オーストラリアに1年半滞在し、メルボルン大学で政治学を専攻すると共に、労働運動を指導する進歩的オーストラリア人やタイ人留学生の友人と共にオーストラリア入管当局の有色人種差別、白豪主義の方針に反対する運動に参加した。タイ帰国後は1949-52年にかけて、労働者、農民、都市下層階級を主人公にした短編小説を相次いで発表した。1934年頃までの初期小説と比較すれば、オーストラリア留学後のシーブーラパーの作品には明らかに変化が見られる。初期作品に見られるのは、身分意識への挑戦、素朴な人道主義、門閥によらず学問と努力によって社

会的成功を成し遂げる人物の讚美であったが、留学後の小説では、社会格差を生み出す資本主義を否定する社会主義寄りの変革思想が明確に見られるようになる。その代表作が後述する長編『また会う日まで』*Chon Kwa Rao Cha Phop Kan Ik* (1950) である。その一方、シーブーラパーはこの時期に仏教への関心も深め、1952年には南タイのスアンモーク（涅槃園）を訪れ、かねてより書簡で交流のあったプッタタート比丘 Phutthathat Phikkhu (1906-93) と仏教の神髄についての対話を行っている。この時の対話をもとに執筆されたのが、一般向けの平易な仏教概説書『仏法』*Phutthatham* (1952) である。1951-52年、「タイ国平和委員会」の副会長に選出され、平和運動およびアメリカの朝鮮戦争遂行への反対運動を行った。

同時期に、友人と協力して1941年制定の印刷法<sup>(15)</sup>や新聞検閲の廃止を求める運動を組織。また、旱魃と冷害に苦しむ東北タイへの救援物資配給活動を行った。しかしながらこの活動が共産主義者支援であるとされ、1952年11月10日に多くの友人とともに逮捕され、禁固13年4ヶ月の判決を受けた。この事件は「平和反乱事件」と呼ばれる<sup>(16)</sup>。しかしシーブーラパーは獄中でも創作的意欲を燃やし続け、遺作となった長編小説『未来をみつめて』(1955, 57) やその他の論説を執筆した。また法律の勉強を続け、獄中にいながらタマサート大学の学位を取得。弁護士の資格を取得すると、この事件の法廷において法律家としての権利を初めて行使した。1957年2月21日、仏暦2500年記念の恩赦により出獄、その後は自宅にこもって執筆活動に専念した。

1957年11月にはソビエト革命40周年祝賀会への招待を受け、複数の同志とともにソ連を訪れた。1958年8月には中国からの招待を受け、13名からなる文化交流使節団の団長として訪中。また同年10月、タシケントで開催された第2回アジア・アフリカ作家会議に出席するために中国からソ連に向かった<sup>(17)</sup>。その後、タイではサリット元帥<sup>(18)</sup>によるクーデタが発生したために、シーブーラパーは中国に滞在し続ける決心をした。1960年には毛沢東(1893-1976)や周恩来(1898-1976)との会見を果たし、1964年には北京で開かれた「科学検討会議」社会科学分科会の座長をつとめた。1965年、ハノイで行われた米国侵略反対ベトナム人民支援国際会議に団長として参加。1966年には北京で開催されたアジア・アフリカ作家会議の議長をつとめ、演説を行った。

1973年10月14日にタイで起こった学生による民主化革命の成功をシーブーラパーは喜び、敬意を表した<sup>(19)</sup>。1974年6月16日、肺炎と狭心症を併発し亡命先の北京で死去。享年69歳であった。生誕100周年にあたる2005年には、ユネスコによって世界の偉人の一人として顕彰された。また、逝去から40周年にあたる2014年の8月には、シーブーラパーの生涯と活動を描いたミュージカル『シーブーラパー —— 自由の記録』*Siburapha Bantuek Haeng Itsara* がバンコク・アート・アンド・カルチャー・センターにて催された。

## 2.2. 代表的な作品

シーブーラパーの代表的な初期小説は以下の通りである。まず、彼の処女作とされているのは1924年に発表された短編「兄が来た」Khun Phi Ma Laewである。1924-27年にかけては習作の時代で、主に短編小説を執筆していた。「愛の世界」Lok Sanniwat (1927) や「願望」Khwamprathana (1927)、「結婚生活」Chiwit Somrot (1927) などの初期作品群は、男女の恋愛を中心としたロマンス仕立ての作品が多かった。彼の出世作として最もよく知られているのが『快男児』(1928)であり、家系・門閥や財力によらずに立身出世を果たす新時代の青年が描かれている。

1929年、友人の作家らとともに文芸誌『スパープ・ブルット』を創刊すると、その第2号に短編「いとこ」Luk Phi Luk Nongを寄稿した。その他に彼は、『スパープ・ブルット』に計二つの長編を連載形式で執筆している。一つは「じゃじゃ馬馴らし」Prap Phayot (第1-15号に連載)で、もう一つが「罪との闘い」Phacon Bap (第16-34号に連載、1934年に単行本化)である。ドストエフスキーの『貧しき人びと』に影響を受けて書いた長編『人生の闘い』は、1932年に発表されている。この作品を境に、人道主義や平等な社会を理想とする価値観が作品の中に明確に映し出されるようになってくる。その後『プラチャーチャート』紙に長編「人生に必要なこと」Sing Thi Chiwit Tongkan (1936)を連載していた。日本から帰国した直後、長編「絵の裏」(1937)を同じく『プラチャーチャート』紙に連載。日本に留学中の青年ノッポンNopphonと既婚のキラティKirati 王女との悲恋物語は、古い道徳観や旧支配階層の限界を暗示してもいる。

1937年から戦後の1949年までの間は、新聞編集に関わる一方、小説の創作活動はまったく行わなかった。太平洋戦争を挟む政治的激動この時代、シーブーラパーは現実社会の事実を伝えるジャーナリズムをフィクションとしての小説より優先していたと考えられる。1950年には雑誌『ピヤミット』Phiyamit (親友)に連載していた長編「また会う日まで」を単行本として刊行した。これはタイ人の青年がオーストラリアで労働運動家の女性に出会い、感化されるという物語であった。筆者は、長いブランクを経て書かれたこの作品以降の小説をシーブーラパーの後期作品であると位置づけている。

これ以後、彼の小説は社会主義的なメッセージを持つ性格を強めていった。そうした性格を有する短編に「彼は目覚めた」Khao Tuen (1952) や「少し力を」Kho Raeng Noi Thoe (1953) などがある。獄中で執筆された長編「未来をみつめて」は、雑誌『ピヤミット』に連載された。これは2部に分かれており、「第1部少年期」が1955年、「第2部青年期」は1957年に発表された。しかしながら遺作となったこの長編小説は未完のまま終わり、「第3部壮年期」が書かれることはなかった。

### 3. 文芸誌『スパープ・ブルット』の性格と短編「いとこ」

以下では、シーブーラパーが立憲革命以前に発表した作品の内容に立ち入る前にまず、

彼が中心となって1929年に創刊した文芸誌『スパープ・ブルット』の性格について押さえ、続いてこの文芸誌に掲載された短編「いとこ」の作品内世界を分析する。この文芸誌の発行経緯、雑誌の概要については各号の編集後記とスチャートの『雑誌の友 スパープ・ブルットの短編小説』[Suchat, Wanna ed. 2010]を主たる参考文献とした。

### 3.1. 作家集団「スパープ・ブルット」と文芸誌『スパープ・ブルット』

若手作家集団「スパープ・ブルット」は、当時24歳のシーブーラパー、彼の学生時代の後輩であったサニット・チャルーンラット Sanit Charoenrat (1907-82)、サティット・セーマーニン Sathit Semanin (1908-?), そしてマーライ・チューピニット Malai Chuphinit (1906-63)、オップ・チャイヤワス Op Chaiyawasu (1901-97) など、文芸活動に情熱を燃やす同志たちによって結成された<sup>(20)</sup>。中でも中心メンバーはテープシリン校で学んだ同級生らで、実際の雑誌の編集はほぼすべてシーブーラパーが担っていた。この集団名を冠した文芸誌が『スパープ・ブルット』である。

1929年6月1日に創刊号が発行され、その後は毎月1日と15日の2回発行される隔週刊雑誌となった。翌1930年11月30日の第37号まで、1年半の間に計37号が刊行された。創刊当時、タイ国内30県にまたがる70カ所の取次書店に500件以上の定期購読の申込みがあったという[Udom 1979:88]。価格は一冊30サタンで、通常購入であれば半年で3.6バーツ<sup>(21)</sup>、年間で7.2バーツになるが、定期購読だと半年分が3.5バーツ、年間で6バーツとなる割引制度があった。定期購読の会員数については、第23号(1930年5月1日)の編集後記でシーブーラパーは、「3ヶ月経たないうちに会員は400名以上になり、現在では800名を超えました。これは隔週刊雑誌をいくつも作ってきた人からも最も多いと言われるほどの数字です」[Khana Suphap Burut 1930:3752-53]と記しており、先行する他の雑誌を尻目に、比較的短期間で世間の注目を浴びる文芸誌になっていたことが分かる<sup>(22)</sup>。わずか3桁の数字ではあるが、当時の識字率や知識人の数の少なさから見れば、大善戦の部類であった。ちなみに今日でも小説の初版は1,000-3,000部、学術書で500-1,000部程度である。

しかしながら、『スパープ・ブルット』は創刊時には記録的な発行部数を誇り人気を集めたにもかかわらず、1年半ほどで廃刊を迎えた。その理由としては、運営資金の不足や原稿の遅延、他の新聞・雑誌との掛け持ちによる作家の肉体的、精神的負担の限界等が考えられる<sup>(23)</sup>。スチャートは、廃刊の理由について次のように述べている。「理由としては「経営面のこと」(収入不足)、あるいは編集者自身が「満足したこと」が挙げられるかもしれない」[Suchat ed. 2005:102]。彼は廃刊の原因を、「作家たちが小説家よりも新聞記者としての道を選んで進んでいったことが大きい。彼らはジャーナリズムをより志向していった。生計を立てていくためにも新聞の仕事をしてお金を稼ぐ必要があった」<sup>(24)</sup>と推測している。主宰者であったシーブーラパー自身も、この後に新聞編集を主たる職業として小説を書き



続ける道を選んだ。また彼以外の作家たちも、後に新聞の編集者をつとめる人物が多かったことから、生活のための方向転換によって廃刊へ至った可能性が高い。

以上が、文芸誌『スパープ・ブルット』の発行と内容に関する概要である。

### 3.2. 短編「いとこ」に描かれたもの

短編「いとこ」は、1929年6月15日刊の『スパープ・ブルット』第2号に掲載されたシーブーラーパーの短編小説である。この作品は本誌に掲載されたのみであり、これまでの先行研究でも扱われたことはない。短編小説は単一な筋と簡潔な構成の中に作家の主題や趣向が凝縮されるものであり、またシーブーラーパーが『スパープ・ブルット』創刊当初に書いたことを知るためにも、この「いとこ」という作品に注目する。まず簡潔にあらすじを紹介したい。

トンブリー（バンコク西岸部）に住むニット Nit のところに、カムペーンペット（タイ中北部）へ行っていた従兄弟のチャン Chan が帰ってくる。再会を喜ぶ二人であったが、チャンは女らしく成長したニットに対して恋心が芽生えるのを自覚する。そんな中、なぜカムペーンペットへ行ってしまったのかと、ニットはチャンにしつこく問いただす。3年前に家を出て行ったのは、若い男女の関係を案じたニットの父から暗黙の示唆を受けたためだとチャンは告白する。動揺するニットにチャンも自問自答を続けるが、ある晩彼女に自分の愛を伝える。ニットは自分も同じ気持ちだが、応えることはできないと涙を流す。彼女は隣人のウドム Udom という留学帰りの青年との婚約が決まっていたのだ。その事実で失望し悲恋に打ちひしがれるチャンに、ニットは口づけをする。

この短編では、西欧に門戸を開いて近代化を進め、モダンな生活スタイルが普及しつつあった当時のタイにあつて、男女間の恋愛ではいまなお身分的格差が大きな障壁として存続しており、近代的な自由恋愛の意識に乏しい現実が描かれている。ニットの父は「プラ」Phra の官等<sup>(25)</sup>を持ち、広大な農地を所有する資産家である。「オフィス」勤めという記述からも、上級官吏ではないかと推測できる [Khana Suphap Burut 1929:298]。当時のタイ社会における官僚のステータスの高さは、ニットの婚約者の立場にも表れている。良家の子息であるウドムは留学帰りであり、「西欧留学経験者」Nakrian Nok/Hua Nok というステータスはこの時代、高級官僚への切符として重視されていた。

そのことはチャンの次の言葉からもうかがえる。

「ウドムさんだけど、もうすぐルアンの官等を得られるそうだね。いまどきの欧米留学帰りの人たちはほとんど何かの官等を授けられるからね。」 [宇戸訳 2013:57]

この台詞からは、外国留学が確実な将来を保証するものであり、上流社会に加わるための必要不可欠な条件である、と認識されていたことが分かる<sup>(26)</sup>。ニットは従兄弟のチャンを

愛しているにもかかわらず、彼女の父がウドムとの婚約を取り付けたため、それに従うことになる。ここには「身分」という意識の存在が際立っている。ニットの父は、現有資産、社会的ステータス、名誉を含めた意味での「財」を、世代を越えて継承していくことを要求している。

恋愛や結婚という観点から見れば、チャンは次のように自らの恋愛感情を正当化している。

「一体どこがふしだらだというのか。(中略) どうしてぼくがニットを恋愛対象として愛してはいけないのか。馬鹿馬鹿しい。伯父の考えは馬鹿げている！」

[宇戸訳 2013:61]

チャンの愛は報われずに終わってしまうが、彼の恋愛への向き合い方には制約や干渉、格差に縛られない、自由恋愛を望むまなざしが内在している。ニットとチャンの二人は、互いに恋愛感情を抱いているにもかかわらず、身分や家柄の違いに基づく家族からの圧力が障害となり、悲恋に終わってしまう。シーブーラパーは、こうした挫折を描くことで逆に、自由恋愛や結婚への若者の憧憬を言語化したのである。そしてこの点こそが、それ以前の体制順応的なタイ文学における表現とは異なる点だと言える。

「いとこ」はまた、それまで暗黙のタブーとされていた男女間での抱擁や接吻といった直接的な愛情表現の身体行為も描き出した。夜の寒さを心配したチャンが自分の上着を脱いでニットにかけ、ニットがその服をまたチャンに着せ返す場面があるが、ここには服を介在とした愛情の交換がある。そして二人の愛情表現はそうした間接的・精神的行為に留まらず、チャンがニットの手を取り抱き寄せ、最後には悲嘆にくれるチャンにニットの方から口づけをするという肉体的行為まで描かれる。古典を含めた従来のタイ文学で描かれた求愛や求婚というものは、作品自体が公的な性格を帯びていたために、古来の慣習に従って親族または仲人を通して行われるものであった。それに比べ、恋愛感情を直接相手に伝える場面や身体接触に及ぶ場面を描いた文学的営為は、タイ文学史の中ではきわめて画期的で異例なことであったと言える。こうした表現に、読者は新たな時代の恋愛のあり方を感じ取ることができたのではなかろうか。

さらに風俗文化の面においては、「いとこ」はモダンな都市生活の細部を描写し、地方在住の若い読者の夢を掻き立てる工夫をしている。

チャオプラヤー川の左岸はまったく目新しいものになった。パッタナカーン映画館の前は夜にはまるでアメリカのブロードウェイの四つ角のようである。しかし右岸の方は以前と何も変わらない。船漕ぎは上半身裸で服を纏っていないし、豚は道ばたで寝ている。そしてワットアルン寺院の広場には昔ながらのやり方で染めた黒い布が干

してある。

[宇戸訳 2013:52]

ここには近代的な街に変貌しつつあるバンコクと、発展から取り残された対岸の農村部の様子が、対照的な光景として描かれている。タイで最初の常設館であるクルンテープ Krungthep 映画館ができたのは 1907 年で、その後 10 年の間にサムイエーク Samyeak 映画館、ラッタナピーラカー Rattana Piraka 映画館、パッタナカーン Phattanakarn 映画館が作られた。中産階級の人々にとっては、映画こそが最も新しくモダンな都市文化の中核となっていた [Chai 1976:440-44; Vella 1978:154]。

また登場人物のファッションもモダンで、男女を問わず西洋的な装いをさせている。例えば男性であれば、紳士の象徴的なアイテムである「帽子」がしばしば登場する。チャンがニットと再会する場面で、「帽子を取ることで敬意を払い、東屋につながる木の橋を静かに渡っていき」[宇戸訳 2013:52] とある。帽子の着用は、ラーマ六世が自ら積極的に推奨した西洋ファッションの一つであった [Vella 1978:171]。「いとこ」に限らずこうした傾向は、『スパープ・ブルット』に掲載された他の小説にもほぼ共通している<sup>(27)</sup>。ここからも、シーブーラパーをはじめとする同人作家たちが西欧的な文物を積極的に読者に広め、都市在住の女性であっても依然として曜日毎に色が決まっている民族衣装を身につけるような、旧時代の美意識との差別化を図ろうとしていたことが分かる。

シーブーラパーをはじめとする『スパープ・ブルット』の作家たちが、西欧文化の中にタイの因習的、固定的な価値意識を突き崩す可能性を見出していたことは明らかで、彼らはそれを、新時代の恋愛観、結婚観を持つ人物が登場する小説の執筆を通じて積極的に発信した。西欧近代社会を模倣した社会体制の変革がやっと遠方に見えてきたばかりの絶対王制下のタイにあって、表現者としての彼らにできたのは、当面は若い読者や知識人に向けて個人の恋愛や結婚に的を絞ったテーマの物語を提示することであった。しかしその先には、因習や伝統からの解放、身分意識の克服、個人の尊重、ひいては西欧に倣った政治体制への変革を見据えていた。

#### 4. 論説「人間の権利」は何を訴えているか

次に、『スパープ・ブルット』廃刊後にシーブーラパーが発表した論説「人間の権利」Manutsayaphap<sup>(28)</sup>に着目し、26歳とまだ若かった当時の彼の啓蒙的な考えの一端について考察したい。

1931年末、日刊新聞『タイ・マイ』紙にシーブーラパーの書いた論説「人間の権利」が掲載された。12月8日と12月11日の二度にわたって掲載されたこの論説は、絶対王制下における支配階層への批判と、民主主義国家への変革を求める内容であった。過激な主張であるという判断がなされ、彼は『スパープ・ブルット』時代の友人とともに『タイ・マ

イ』紙を辞職する結果となった。「上流階級が好まないような強烈な論説であった」ために、しつぽを切られるように出版社を移らざるを得なかった [Suchat ed. 2005:27]。

しかしその翌月、年が明けた1932年1月にシーブーラパーは日刊新聞『シー・クルン』紙に再び「人間の権利」を掲載した。それらは1932年1月10日、1月16日、1月21日の三度にわたり連載されている。彼は『シー・クルン』紙連載初回の冒頭で次のように述べている。「多くの読者にこれを検討する役割を担って頂きたい。本稿は長く叙述する必要があるため、『タイ・マイ』紙に掲載された初稿を元にし、さらに良いものとなるよう新たに改稿した」 [Kulap 1932/1/10:7, 引用者訳]。シーブーラパーは『タイ・マイ』紙の辞職前から、『シー・クルン』紙の執筆に加わっていた。その当時彼はまだ26歳であった。この論説についてシーブーラパーは友人に次のように語った。「実際、あの論説の中には害を及ぼすものは何もないよ。私は人民の権利、人間の平等、社会的公正について語ったまでだ」 [サティエン 1987:44, 54]。

しかしながら、当局によって反体制的という烙印を押されたこの論説の掲載により、『シー・クルン』紙は停刊処分を受けることとなり、出版許可証を取り上げられ、印刷機が鎖で縛られるという処分を受けた。これは新聞における言論の自由を制限した例として、従来の研究でも指摘された事件であったが、実のところ停刊状態にあったのはわずかに9日間であった [Suchat ed. 2005:29]。ただし、シーブーラパーのこの論説とその後の弾圧を目にして、民主政体への変革を求めようとする声一般人の間にも高まっていったことは疑いない。事実、1932年6月15日の立憲革命まで5ヶ月と迫っていた。スチャートは、「人間の権利」は、クラブ・サーイプラディット理想を一から十まで表現したものである」と述べている [Suchat ed. 2005:25]。

この論説の中では、様々な西洋の偉人の言葉やエピソードが引用されている。例えばソクラテス Sōkratēs (前470-399)、プラトン Platōn (前427-347)、ヴォルテール Voltaire (1694-1778)、スマイルズ Samuel Smiles (1812-1904) などである。シーブーラパーは彼らの思想を紹介しながら、啓蒙主義をタイの地に広めようとしていたと言える。「人間はみな、人間らしさという観点から常に等しくあるべきである。そしてこの人間の権利とは、それ自体が最も気高いものである」という人権思想をシーブーラパーは堅く信じていた。この思想は彼の実質的な出世作と言える長編『快男児』にも描かれており、また「真実の土台に基づいた上に人間は発展していく」という考え方は初期短編の「火遊び」Len Kap Fai (1928)にも表れていると、先のスチャートは指摘している [Suchat ed. 2005:26]。

『シー・クルン』紙における計3回の連載では、それぞれの回で主張したい点が冒頭に要約の形で提示されている。まず1月10日号の第1回目では、スマイルズの著作から以下の言葉を引用している。「誠実さとは真実であり、真実とは誠実さのことである」<sup>(29)</sup>。ここでは真実と誠実さは常に対でなければならぬという、変革の主体があまねく保持すべき根本的な道徳観をまず強調している。1月16日号の第2回目では、「人間の虚妄とは、権

力がすべてを正しく行ってくれると思っていることである」と述べ、プラトン、リンカーン Abraham Lincoln (1809-65)、ヴォルテールらが常に真実を求めていたと述べながら、自己の権力観を主張している。また、ポエニ戦争におけるローマ人レグルス Marcus Atilius Regulus (前 249 年頃歿) のエピソード<sup>(90)</sup> の紹介では、「真実に敬意を払う」ことを繰り返し記述している。1 回目には引き続き、ここでも繰り返し物事の本質に迫る上で絶対不可欠な「真実」の重要性を強調しているのは、逆に言えば当時のタイ政治が民衆に対しことごとく真実を隠蔽していたことに対する怒りがあったからであろう。

新聞や雑誌に関わる人間として、一般人よりも情報に精通できる立場にあったシーブーラパーが、国民がこの先どのような政体や社会を築くにしても、その基本には「真実」を元にした実のある議論や理論展開や活動が必要であり、その前提条件が不十分なままでは社会変革はおぼつかないと考えたのは、他の同人仲間の上を行く卓見であったと言える。1 月 21 日号の第 3 回目で、シーブーラパーは欧米先哲からの引用ではなく、初めて自分自身の言葉で読者に次のように語りかけている。「私は、読者の皆様にコモンセンスの価値を軽視して頂きたくない。今後も人間の権利について考えるためにも」[Kulap 1932/1/21:7, 引用者訳]。彼は 3 回の連載の中で、以下のように人権への問題意識を喚起している。

我々はいかなる権利を有しているのか。そして国家が定めた法の原則においてはどの範囲でその権利を行使すべきか。我々の多くはそれを知らず、知ろうともしていない。なぜシャムの国民がこの最重要課題に関心を持たないのか、私には理解できない。

[Kulap 1932/1/10:7, 引用者訳]

我々は他人の思想の奴隷になってしまっている。この理由の一つ、我々が真実に向き合おうとしていないからである。

[Kulap 1932/1/16:7, 引用者訳]

現在のロシアでは権力は貧しき人民のもとにある。また、欧米や他の国々でも平均的に権力というものは広く個人の中に存在する。 [Kulap 1932/1/21:7, 引用者訳]

これらの言説から、彼が 3 回の連載論考で読者に訴えたのは、一言で言えば、西欧諸国のような国民国家を希求するにせよ、ロシアのような社会主義を希求するにせよ、その前提としてまず支配階層の言うことに隷従することをやめ、人権思想を中核とした近代人としての意識をしっかりと確立せよということであったことが分かる。

## 5. 長編小説『人生の闘い』とヒューマニズム

小説『人生の闘い』は 1932 年、立憲革命の直前にシーブーラパーが発表した長編で、1932

年6月1日に初版が単行本として出版された。シーブーラパーの9番目の長編となったこの作品では、貧困に苦しみながらも文通を通して互いに支え合う男女が、ヒューマニズム的なタッチで描かれている。長編『快男児』が自己の能力と努力によってのみ社会上昇を果たす立身出世を讃美した小説、短編「いとこ」が近代的な恋愛観、結婚観を提示した小説、「人間の権利」が近代人としての意識の覚醒を訴えた論説であったとすれば、この『人生の闘い』はそれらから歩を進めて、タイに浸透しつつある資本主義の孕む負の面を表現した小説であると言える。

『人生の闘い』は、シーブーラパーが社会的弱者に目を向け、ヒューマニズムの意識を持って描いた作品だと言われている。それ以前のタイの小説にも社会的弱者が描かれることはあったが、身分の違う男女の恋愛話が主であり、貧しかった主人公も富を得たり出世したりするハッピーエンドが定番であった。「ナワニヤイ」Nawaniyai (新しい時代の物語=小説) という語彙がタイに登場したのはようやく1930年代に入ってからであり、それまでは「ナンスー・アーン・レン」Nangsoe An Len (娯楽の読み物) というのが一般向けの物語の名称だった [サティエン 1987:41; 国際交流基金アジアセンター編 1998:61]。つまり人々は現実世界からの明らかな逃避を小説に求めていた。自己のあり方を見つめ直したり、人間や社会に対して従来と違った見方をしたりすることは、小説には期待されていなかった<sup>(31)</sup>。1924-27年にかけてシーブーラパーが書いた初期短編小説のほとんども、そうした世間の要望に応える作品であった。短編「いとこ」も男女間の格差によって悲劇の結末を迎えるが、社会批判やヒューマニズムを訴えるという要素はなく、なお娯楽的要素が大きい。

しかし、ハッピーエンドからほど遠い『人生の闘い』は、貧しさゆえに男女が結ばれない悲劇、金銭がすべてという社会的風潮に抗いきれない悲劇の物語である。主人公のラピンRaphinは愛を優先し、ヒロインのプルーンPhloenは金を優先した。「太陽」という意味の名のラピンと、「快樂」という意味の名を持つプルーンの二者の間には、文通では埋めがたい溝が存在している。作品内で描かれる裕福な人々の生活によっても経済的格差が明示されている。ラピンが10サタンの服に7サタンの帽子、6サタンの靴を身につけているのに対し、同僚のケーユーンKeyunは24パーツの服に26パーツの帽子、14パーツの靴を身につけ、ホテルでの友人との会食には80パーツを支払うといった描写など、ラピンには信じられないほどの浪費をしている<sup>(32)</sup>。ケーユーンの金銭感覚に関してラピンは次のように語る。

「まるで彼は他の世界の人のように感じられる。(中略) 地位や月給、労働時間は同じなのに、なぜ私と彼がこんなに違うのか分からない。」

[Siburapha 2005:80-81, 引用者訳]

資産家の父と、王族に嫁いだ妹とを持つケーユーンと、貧しいラピンの生活は対照的であり、現実社会の不条理と主人公の無力感が描かれている。

この小説では、資本主義化の進展に伴い前近代社会にあった善や徳という観念が薄れてゆき、金銭が物事を左右するようになった社会がいたるところで批判されている。

「今は金さえあれば何でも手に入れることができるようになった。名誉や、愛情でさえも。つまり名誉ある人が必ずしも美德を持っているわけではなく、単に金を持っているだけの人ということになる。」  
[Siburapha 2005:145, 引用者訳]

さらに、金持ちは自己利益を中心に行動するため、貧者への同情や慈悲を期待することは難しいとラピンの口から語られる。一人の中年女性が僧侶に托鉢を行う一方で、食料と衣服を求める乞食には何も恵まずに追い払うというエピソードも挿入されている。仏教の積徳行為に対しても常に見返りを期待する人間の心が批判されている。

ここには、資本主義がタイ社会にもたらす歪みについてのシーブーラパーの批判的な見方がある。シーブーラパーはオーストラリア留学時代にかの国の労働運動に間近に触れたことで、帰国後は急速に社会主義思想に傾倒していった。しかし『人生の闘い』を書いた1932年時点では、人間の思想や哲学、宗教といった上部構造が経済や統治システムという下部構造によって決定されるという史的唯物論をしっかりと理解していたかどうか、疑問符がつく。1932年当時の思想的バックボーンは社会主義ではなく、普遍的なヒューマニズムに留まるものであったというのが筆者の考えである。しかし変革のプログラムを欠いたヒューマニズムのみでは、ラピンを追い詰めたような不平等な社会を変革することはできない。そこに当時のシーブーラパーの思想的限界があった。『人生の闘い』を書き上げて以降、戦後にオーストラリア留学から帰国するまでの長い期間、先祖返りとも言える通俗的な恋愛小説『罪との闘い』(1934)を除いて創作が途切れたのは、その時期にヒューマニズム思想を乗り越える新たな思想を模索していたからだと思われる。

ところで『人生の闘い』のもう一つの特徴に、作家の社会的役割を強調した部分が多いことが挙げられる。ラピンが目標とする憧れの作家として、ドゥシット Dusit という人物を登場させたことがそれである。ドゥシットは、上流階級内での自己満足的な作家と文芸界のあり方に不満を抱いていた。作家という存在を社会的意義のある職業として浸透させることに熱心なドゥシットに、ラピンは強く影響を受けている。作者のシーブーラパーがこの作品の登場人物に自身を仮託したとすれば、それは主人公のラピンではなくむしろこのドゥシットの方ではなかろうか。作家という職業の認知度が低かった当時のタイ社会において、作家のあるべき姿を読者に伝えるため、シーブーラパーはこうした人物を利用して民衆啓発に貢献するという作家の社会的使命を強調したのだろう。

## おわりに

『スパープ・ブルット』に掲載された短編「いとこ」では、恋愛や結婚は本来的には個人の自由意志に基づくべきであるという、タイ社会にとっては真新しい価値観が描かれた<sup>(33)</sup>。『スパープ・ブルット』は、小説を通じてこの新しい恋愛観に触れた読者の多くから歓迎された。しかし最後には破局してしまう「いとこ」の結末から見えるのは、自由意志に基づく恋愛といえどもなお門閥や家柄といった身分意識、財力や学歴といった社会的属性を乗り越えることは容易ではないという事実だった。それは物質的には西欧を模倣しながら、政治や社会のシステムは旧体制が続いており、人々の意識も旧態依然のままだったからである。

シーブーラパーはそれを打ち破るために、小説という虚構の物語での間接的な啓蒙活動を跳び越え、新聞や雑誌での直接的な言論活動に踏み出した。その一例が発禁処分を受けた論説「人間の権利」である。その中で彼は、人間だれもが自由になり平等に扱われるには「真実」を知ること、「真実」に基づいて国家や社会や人間の活動を判断する近代人に成長すべきことを広く訴えた。物質ではなく精神のモダニズム<sup>(34)</sup>こそが理想的な社会の実現には必要だということを実感し、人々にも訴えていたシーブーラパーが、『スパープ・ブルット』以降は次第に恋愛小説の執筆から遠ざかり、道徳的な人間の生き方を描いた作品を執筆したり、新聞や雑誌での論説に力を注いだりしたことからもそれは明らかである。

しかし、「真実」を知り社会の仕組みを理解しただけでは何も問題は解決しない。そこには、歴史的に積み重ねられてきた様々な矛盾を打破する体系的理論とその実践が伴う必要がある。この時期のシーブーラパーにはまだそれがなかった。そうした苦悩と格闘していた彼の前に現れたのが、ロシアの作家ドストエフスキーの小説『貧しき人びと』のヒューマニズムであった。長編『人生の闘い』は確かに『貧しき人びと』にヒントを得て、それを模倣した小説である。しかし翻案や模倣に留まることなく、彼がそこにタイの初期資本主義が早くも孕み始めた課題を描き込み、同時に多くが依然として不遇であったタイ作家の仕事の意義を書き加えたことは上で見た通りである。ただ、『人生の闘い』における作者の思想はヒューマニズムで留まっており、社会主義思想の洗礼もまだ受けてはいなかった。

『人生の闘い』では、貧困の中でも人間の平等を追求し続ける未来指向型の主人公を登場させ、確かにシーブーラパーの理想と希望を反映させてはいる。しかし、ヒューマニズムを前面に押し出すあまり、当時のタイ社会から見て非現実的な人物像になってしまったという欠点がある。そこがドストエフスキーの『貧しき人びと』とは決定的な違いである。その理由は二つ考えられる。一つはジャーナリストとして活動していた彼が、文学作品をそれ自体で完結した言語芸術世界であると考えより、民衆啓蒙のための手段だと見なしていた可能性があること。もう一つはヒューマニズムの先にあるべき変革の思想をいまだ獲得できておらず、結果として道徳文学的なもので終わったのではないかということであ



る。しかし、平等、公正な社会の実現を訴えた彼が、文学者としてよりもジャーナリストあるいは社会運動家として活動し、その行為が今日まで高く評価されている事実自体は、ことさら否定すべきことではない。なぜならば、小説家と編集者が分離していなかった時代に、小説を通して思想を広め人々を啓発しようとするのは、リベラル思想を持つ当時の思想家には当然の手段であったからである。

本稿ではシーブーラパーの初期作品から重要と思われる小説と論説を任意に抽出して、その初期思想に限定して分析した。しかし、オーストラリア留学後に執筆された彼の小説や新聞・雑誌の論考では、それまでになかった思想的飛躍が見られる。従ってシーブーラパーの思想の包括的な理解には、これら後期の著作の研究が必須であると考えている。

### [注]

\* 本稿におけるタイ語のローマ字アルファベット表記は、原則としてタイ王立学士院 Ratchabanditsathan が定めた表記法 (1999 年式表記) に従った。また日本語カタカナ表記は、「バンコク」など広く定着していると思われる場合を除き長母音、短母音の区別をしたが、有気音、無気音の差異は示されていない。

\* タイ人の人名は一般に「スチャート・サワツシー」Suchat Sawatsi のように名 (given name) + 姓 (family name) から成り立っているが、個人は名で呼ばれる場合が多いので、出典注の表示は [Suchat ed. 2005] の形式にし、本文中でも「スチャート」として言及した。文献一覧においても、名+姓の順のまま表示した。

- (1) 1920 年代末、タイ語や英語による新聞雑誌の発行はバンコクに集中していた。産業や文化、情報の集積地であった首都には、印刷機械や技術者のほか中等教育を受けた新興知識人層が集中していたためである。また 1929 年のバンコクの人口密度は 327 人/km<sup>2</sup> であり、他の地方と比べ圧倒的に高かった [Statistical Yearbook of Siam 1933-35:74]。新聞雑誌は印刷所や新聞社、売店、鉄道駅等で販売され、定期購読システムも存在した。郵便網の拡大もあり、1920 年代初頭にはバンコク発行の新聞を地方にも郵送、販売することが可能となった。
- (2) 当時欧米小説の翻訳は一定程度の蓄積があったが、『貧しき人びと』を始めとするロシア文学はまだタイ語には翻訳されていなかったため、シーブーラパーはこの作品を英訳で読んだ。バンコクの「シーブーラパー記念館」には彼の蔵書が保存されているが、その中には『貧しき人びと』の英訳 *Poor Folk and the Gambler* (translated by C. J. Hogarth, London: J. M. Dent, 1915) も含まれている。
- (3) 『絵の裏』は日本語、英語、中国語のほか 13 ヶ国語に翻訳された。タイでは 1981 年、91 年、98 年の 3 度にわたり映画化され、2006 年には舞台化もされた。タイ国内で最も知名度の高い近代文学作品であると言われる。
- (4) アーカートダムクーン・ラピーパット殿下はラーチャブリー Ratchaburidirekrit 親王 (1874-1920) の第 6 王子。英、米に留学。1928 年に帰国後、内務省勤務を経て執筆活動に入る。

- 『人生劇』 *Lakhon Haeng Chiwit* (1929) や『黄色い肌, 白い肌』 *Phio Lueang Phio khao* (1930) 等の作品で身分意識や古い価値観への批判を表した。滞在先の香港で客死 [日本タイ学会編 2009:45]。ドークマーイソットは女性作家で、本名ブッパー・ニムマーンヘーミン Buppha Nimmanhemin。13歳まで王族として王宮内で暮らした。処女作『彼女の敵』 *Satru Khong Chao Lon* (1929) が『タイ・カセーム』 *Thai Kasem* (平和タイ) 紙に掲載される。華麗な文体と仏教道徳を含む彼女の作品は、古典文学を中心とする正統文学 (Wannakhadi) と認知され、著作権は国立図書館に帰している。夫が大使をつとめていたインドで逝去 [トリーシン 1985:50]。
- (5) タマサート大学卒業後、『社会科学評論』 *Sangkomsat Parithat* や『本の世界』、『チョー・カラケート』 *Cho Karaket* 等の雑誌の編集長をつとめ、数多くの若手作家を輩出させた。サルトル Jean-Paul Sartre (1905-80) やカミュ Albert Camus (1913-60) 等外国文学の受容にも貢献。作家としては『壁』 *Kamphaeng* (1970) 等の作品がある。1990年に国民芸術家賞 (文芸部門) を受賞 [日本タイ学会編 2009:195]。妻のシーダオルアン Sidaorueang (1943-) も作家であり、彼女は2014年にシーブーラーパー賞を受賞した。
  - (6) 1977年から83年の間に刊行された月刊誌。その後は『本の道』 *Thanon Nangsoe* (1983-90), 『ライター』 *Writer Magazine* (1992-2001) が刊行された。いずれも最大発行部数は3,000部以下であったが、国内外の作家や作品、出版事情を紹介するなど読書好きの人々の間では貴重な文芸誌として意義を持った。
  - (7) 1920年から25年10月までに発行されたタイ字新聞は、日刊紙、週刊誌合わせて62紙であった。1925年11月から32年6月にかけては86紙とさらに増加した [杉山 2000:60]。
  - (8) 「東方光輝」, 「麗しの東方」という意味。「シー」とは吉祥, 光明, 光輝, 繁栄を意味する語であり、「シー」を筆名に冠するのは当時の流行であった。
  - (9) 仏教の信仰心の厚い在家の男性のこと。タイ語のウバーソックは、漢語の優婆塞<sup>うぼそく</sup>と同語根の言葉である。
  - (10) 1885年創立の中高一貫教育校 (当時8年制)。王族貴族や富裕層の子息が通うバンコクの名門男子校である。
  - (11) 6年生時に「ダーラー・ローイ」Dara Loi (漂流スター) の筆名で学内新聞『シーテープ』 *Sitthep* (天神) を発行した。さらに翌年、『テープ・カムロン』 *Thep Khamrong* (雷神) という名の学内新聞を発行した。
  - (12) ラーマ四世 Rama IV (在位 1851-68) の孫であり、公式名ナラーティップポンプラパン Narathip Phongraphan 親王。その博識とリベラルな見識は今日でも高い評価を得ている [日本タイ学会編 2009:426]。
  - (13) 約15年間首相をつとめた。立憲革命を成功させ、陸軍の実権を掌握し首相に任じられると反対派を肅正, 独裁的な政策を展開した。1941年には日本軍のタイ領通過を認め, 同盟条約を結んだ。1957年サリット Sarit Thanarat (1908-63) によるクーデタで国を追われ, 日本に亡命した [日本タイ学会編 2009:332]。
  - (14) チャニット・サーイプラディットはチュラーロンコーン大学文学部を卒業後, 教職を経て翻訳家となる。ジュリエット Juliet という筆名を使用していた。
  - (15) 出版, 言論の自由を制限した法。「革命団布告第十七号」第二条 (抜粋, 要旨) に「下記の性

格の記事を報道する新聞」を取り締まると明記する。「(五) 共産主義の発生を助長、或いは国の安定を揺るがし破壊する記事。(七) 道徳、或いは国の文化を荒廃させる野卑な言語を使用している記事」[サティエン 1987:456]。

- (16) 政権に批判的な知識人を一掃するためにサリット政権がでっち上げたとされる事件。東北タイ農民の救援活動の背景に、国外共産党勢力と結託した国家転覆の陰謀があるとして、シーブーラーパーほか多くのリベラルな作家、新聞編集者、若手将校らが逮捕、拘禁された[Wiwat 1985:5-38]。
- (17) 戦後、植民地支配から脱却しつつあったアジア・アフリカ諸国で連帯の機運が高まり、1955年のバンドン会議で文学者の連携が図られた。第1回は1956年にニューデリーで開催され、15カ国から作家が集まった。日本からは堀田善衛(1918-98)が参加した。
- (18) 1957年9月クーデタでピブン政権を打倒。1958年に軍事クーデタを敢行し、翌年首相に就任すると強権的支配体制を構築した[日本タイ学会編 2009:153-55]。政治家、新聞記者、作家、学者などの文化人を肅正。シーブーラーパーの著書を共産主義の宣伝書とみなし、販売や所持を禁止した。
- (19) 1973年10月、憲法要求のビラを配布し逮捕された13人の学生らの釈放を求める運動が50万人にのぼるデモに発展した。軍内部の対立と国王の支持もあり、10月14日に独裁政権は崩壊し、その後左翼出版物が奔出した。この学生運動は、その後の農民と労働者の運動の発展に寄与した[日本タイ学会編 2009:90]。
- (20) 1929年4月に撮影されたメンバーの集合写真に写っていたのは以下の18名である。クラブ・サーイプラディット、ウテン・ブーンラポーカー、オップ・チャイヤワス、ラコン・ペーカナン、チョー・プレーパン、クンチョンチャットニサイ、パヨーム・ローチャナウィパー、サヌー・ブンヤキアン、スッチャイ・パリッティサーリコン、サニット・チャルーンラット、ブントーン・レーカクン、パット・ネートランシー、チャラン・ウターティット、チット・ブラタット、ホーム・ニンラット・ナ・アユタヤー、サティット・セーマーニン、チュン・プラパーウィワット、マーライ・チューピニット[Udom 1979:88; Prakat 1988:18-19; Suchat, Wanna ed. 2010:86, 97]。
- (21) バーツ Bat はタイ国立銀行が発行している通貨で、補助通貨はサタン Satang。1 バーツ=100 サタン制はラーマ五世時代の1897年に始まった。
- (22) 発行部数に関しては、中心メンバーの一人であったチャラン・ウターティット Charan Uthathit (1908-88) が第2号(1929年6月15日)で言及している。「創刊号は2,000部が印刷されました。残部は約100部で、今後定期購読会員に申し込まれる方のために大切に保管します。今回の第2号は2,300部に増刷しました」[Khana Suphap Burut 1929:330-31]。先行研究の中では、「創刊号、第2号ともに3,000部を完売した」とされていたが、実際の印刷部数はそれより1,000部ほど少なかったことがこの記述から分かる。発行部数が予想外に伸びていることは雑誌内でも強調され [Khana Suphap Burut 1929:473-74]、第2号は2,300部、第3号は2,500部へと増刷された。雑誌の構成は、短編小説が約4割、連載形式の長編小説が約3割、その他にエッセイや評論、詩、読者からの投稿への返信欄、編集後記等があった。一つの号に掲載される作品数は平均して10編、2年目は微増して平均12編ほどであった。なお「紳士」という雑誌名にもかかわらず、表紙には女性の絵が描かれることが非常に多かった。「画家は、ほぼすべての号の表紙に<sup>レディ</sup>「淑女」

- Suphap Satri を描くことを好んだ」とスチャートは指摘している [Suchat ed. 2005:97]。
- (23) 例えば第 29 号 (1930 年 8 月 1 日) の誌面にて、会費を納めていないにもかかわらず雑誌送付を続ける編集部への感謝を記した読者からの手紙を掲載している。その上で「まだ 300 名の読者が 1 年目の会費を納めて下さっていません。これほど思いやりのある「紳士」的なグループは他にあるでしょうか」というコメントが付せられている [Khana Suphap Burut 1930:525]。
- (24) スチャート・サワッシーへの筆者によるインタビューより [2013 年 8 月 26 日実施]。
- (25) バンダーサク (Bandasak) と呼ばれる官等は 1932 年まで使用された。国王により与えられる一代限りの非世襲制のものであった。官等は上からソムデットチャオプラーヤ (Somdet Chaophraya), チャオプラーヤ (Chaophraya), プラーヤ (Phraya), プラ (Phra), ルアン (Luang), クン (Khun) の順。これらの階級のいずれかに叙されると、同時にその役職に応じた欽賜名が授けられた。
- (26) 1873 年頃からラーマ五世によるチャクリー改革が始まり、内閣制度や地方行政制度、一元的な税制による国家財政制度、近代法制、国民教育、徴兵制などが導入、整備された。近代的教育の拡大に伴い、官費、私費留学生の数は増え続け、ラーマ六世 Rama VI (在位 1910-25) 時代の 1923 年時点でその数は 303 人に上った [Chakkrasin 1982:130]。欧米の学問や語学を学んで帰国した官費留学生のほとんどが様々な官等を授けられ、官僚となった。
- (27) 『スパーブ・ブルット』の他の作家の作品の中にも映画や帽子に関する記述がある。例えば、チャラン・ウターティットの短編「孤独な人生」Chiwit Anatha (第 2 号) や、女性作家ナーラー Nara の短編「女の子」Luk Phuying (第 26 号) にも同じく「パッタナカーン映画館」という名称が登場する。またこの 2 作品に加え、サヌー・ブンヤキアン Sanoe Bunyakian (1905-78) の短編「心の行方」Thang Huacai (第 24 号) でも「帽子を取り、微笑みながら立っていた」[Khana Suphap Burut 1930:3790, 引用者訳] といった記述があり、帽子が一つの象徴として描かれている。
- (28) この論説の邦訳は複数ある。「人間であること」、「人間のあるべき姿」、「人道主義」、「人文主義」である [吉岡 2010; 岩城 1997; 宇戸編訳 2008; 小野沢共訳 1982]。この論説は、「あるべき人間の権利」について主張していると筆者は考えるため、本稿では「人間の権利」と訳した。
- (29) タイ語原文は “Khwamsuetrong Khue Khwanching lae Khwanching Khue Khwamsuetrong” [Kulap 1932/1/10:7]。スマイルズの著作 *Character* (初版 1871 年) の原文では以下の部分である。“Truthfulness is at the foundation of all personal excellence. It exhibits itself in conduct. It is rectitude, truth in action, and shines through every word and deed.” [Smiles 1913:8]
- (30) レグルスは第一次ポエニ戦争でローマとカルタゴの対立を決定的にした人物である。「人間の権利」では、レグルスがカルタゴの捕虜となった際の逸話が挿入され、決して約束を破らなかつた英雄として紹介されている [Kulap 1932/1/17:7]。ローマとの講和交渉に同行させられたレグルスは、カルタゴとの戦争を断固続行せよとローマに説いた。和平会談が決裂した後、再び敵地に戻ろうとするレグルスを家族や友人は止めるが、「講和が不成立なら再び捕虜となると約束した。敵との誓いであろうとも、ローマ人としてその誓いを果たさねばならぬ」と述べたレグルスはカルタゴに戻り、拷問を受けて殺害された。
- (31) そうしたことは仏教書や偉人の伝記、国王の書いた啓蒙書にのみ見られる価値であった。

- (32) 当時の下級公務員の給与は 50 パーツに満たなかった [Thepchu 1988:51]。標準的な初任給は中等教育以下の者で 20-60 パーツ、高等教育組で 80 パーツ前後、欧米留学組は 240 パーツであった [玉田 1999:14]。
- (33) 1900 年頃から留学経験者によるイギリス、フランスの小説の翻訳が進み、タイにもたらされた。マリー・コレリ Marie Corelli (1855-1924)、コナン・ドイル Arthur Conan Doyle (1859-1930)、ハガード Henry Rider Haggard (1856-1925)、モーパッサン Guy de Maupassant (1850-93)、デュマ Alexandre Dumas (1802-70) などの作品が訳された [Udom 1979:78-84]。なおタイ国内では、1927 年 7 月に公開された無声映画『二重の幸運』*Chok Song Chan* が、4 日間で観客数 12,000 人以上という大ヒットを記録した [Nungkhiao 1984:21-22]。このラブ・ロマンス作品の成功により、田舎出身の男性と上流階級の女性が恋に落ちるといったストーリーがその後の映画や小説にも影響を及ぼし、踏襲された可能性があると考えられる。
- (34) 伝統的なものを否定した上で、新時代の感覚を受容し、発信していく傾向を意味する。

### 参考文献

#### [日本語]

- 岩城雄次郎 1997 『タイ現代文学案内——変動する社会と文学者たち』弘文堂。
- 上野千鶴子他 (編) 1996 『岩波講座現代社会学』第 19 卷 (家族) の社会学, 岩波書店。
- 宇戸清治 1988 「シーブーラパー『人生の闘い』について——その人間考察についての一考察』『東京外国語大学論集』38, pp. 30-44。
- 宇戸清治・川口健一 (編) 2001 『東南アジア文学への招待』段々社。
- 宇戸優美子 2014 「タイ近代文学におけるモダニズム表象——文芸雑誌『スパープ・ブルット』の短編小説を中心に」東京大学大学院総合文化研究科修士論文。
- 国際交流基金アジアセンター編 1998 『「タイ文学を味わう」報告書』アジア理解講座 1996 年度第 2 期, 国際交流基金アジアセンター。
- サティエン・チャンティマートン著/吉岡みね子編訳 1987 『チャオブラヤー河の流れ——タイ文学と社会思想』アジアの現代文芸 タイ 3, 大同生命国際文化基金。
- シーブーラパー著/松山納訳 1981 「結婚までの日々」, 蔵原惟人監修/川本邦衛・松山納編集 『世界短編名作選: 東南アジア編』新日本出版社, pp. 5-22。
- シーブーラパー著/安藤浩訳 1981 『未来をみつめて』タイ叢書 文学編 15, 井村文化事業社/勁草書房。
- シーブーラパー著/小野沢正喜・小野沢ニッター共訳 1982 『絵の裏』九州大学出版会。
- シーブーラパー著/宇戸清治編訳 2008 『罪との闘い』アジアの現代文芸 タイ 14, 大同生命国際文化基金。
- シーブーラパー著/宇戸優美子訳 2013 「いとこ」『東南アジア文学』第 11 号, 東南アジア文学会, pp. 52-63。
- 杉山晶子 2000 「シャムにおける国家発展をめぐる言論と立憲革命」東京外国語大学博士論文。
- 玉田芳文 1999 「タイの官僚養成と教育機会, 1892-1932 年」『東南アジア 歴史と文化』28, 東南ア

ジア学会, pp. 3-27.

- ドストエフスキー著/木村浩訳 1969 『貧しき人びと』 新潮文庫。  
ドストエフスキー著/安岡治子訳 2010 『貧しき人々』 光文社古典新訳文庫。  
トリーシン・ブンカチョーン著/吉川利治訳 1985 『タイの小説と社会——近代意識の流れを追う』  
東南アジアブックス 72 (タイの人文・社会 2), 井村文化事業社/勁草書房。  
日本タイ学会編 2009 『タイ事典』 めこん。  
山田昌弘 1994 『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』 新曜社。  
吉岡みね子 1993 『文学で読むタイ——近代化の苦悩, この百年』 創元社。  
吉岡みね子 2010 『タイ 国家と文学』 溪水社。

### [タイ語]

- Chai Rueangsinn 1976 *Prawattisat Thai Samai Kho. So. 1809-1910 Dan Sangkom*, Bangkok: Sinlapaban-nakhan.  
Chaimaiphon Saengkrabang 2005 *Prawat Siburapha (Kulap Saipradit) Chabap Yaowachon*, Bangkok: Khanakammakhon Amnuaiikan Chatngan 100 Pi Siburapha (Kulap Saipradit).  
Chakkrasin Phisetsathon 1982 “Kansong Nakrian Thai Pai Sueksa To Thang Prathet Kon Pho. So. 2475 Lae Phon Kankrathop Thi Mi To Prathet Thai,” *20 Thatsawat Rattanakosin: Ruam Botwikhro Hetkan Samkhan Nai Chuang 200 Pi Khong Krung Rattanakosin*, Bangkok: Samnakphim Aksoncha-roenthat.  
Emon Niranrat 1978 *Thatsana Thang Sangkhom Nai Nawaniyai Thai Samai Ratchakan Thi 7*, Bangkok: Ton Or Grammy.  
Khana Suphap Burut 1929-30 *Suphap Burut*, Bangkok: Samnakngan Hong Kasemsi. Vol. 1 (1929/06/01), Vol. 2 (1929/06/15), Vol. 19 (1930/03/01), Vol. 23 (1930/05/01), Vol. 24 (1930/05/15), Vol. 25 (1930/06/01), Vol. 26 (1930/06/15), Vol. 28 (1930/07/15), Vol. 29 (1930/08/01), Vol. 32 (1930/09/15), Vol. 33 (1930/10/01), Vol. 36 (1930/11/15).  
Kulap Saipradit 1932 “Manutsayaphap,” *Si Krung* (1932/1/10) (1932/1/16) (1932/1/21).  
Nungkhiao 1984 *Phiphittthaphan Nang Thai: Chabap Prawattikan Thisut Nang Thai*, Bangkok: Samnakphim Popcorn.  
Phailin Rungrat ed. 2006 *Withi Kulap Saipradit: Suep Chiwit Siburapha*, Bangkok: Khanakammakhon Amnuaiikan Chatngan 100 Pi Siburapha (Kulap Saipradit).  
Prakat Watcharaphon 1988 ‘*Suphap Burut*’ *Nak Praphan*, Bangkok: Samnakphim Dokya.  
Sathian Canthimathon 1982 *Wannakam Phuea Chiwit Khong Thai*, Bangkok: Samnakphim Sinlapawat-thanatham.  
Siburapha 2005 *Songkhram Chiwit*, Bangkok: Samnakphim Matichon.  
Suchat Sawatsi ed. 2005 *Manut Mai Pai Kin Klæp*, Bangkok: Khanakammakhon Amnuaiikan Chatngan 100 Pi Siburapha (Kulap Saipradit).  
Suchat Sawatsi, Wanna Sawatsi ed. 2010 *Phueanphong Haeng Wanwan Rueangsann ‘Suphap Burut’*, Bangkok: Khongthun Suphap Burut.

- Thepchu Thapthong 1988 *Krungthep Nai Adit*, Bangkok: Samnakphim Sukkaphapchai.
- Trisin Bunkachon ed. 2005 *Khue Itsarachon Khue Khondi Khue Siburapha*, Bangkok: Samnangkan Khana Anukam Kanfai Prasangan Khrongkan 100 Pi Kulap Saipradit (Siburapha).
- Udom Rungrueangsi 1979 *Saphap Khong Wannakam Thai Patchuban*, Bangkok: Samnakphim Sinlapabannakhan.
- Wiwat Khatithammanit 1985 “Khabot Santiphap,” *Thammasat University Journal*, Vol. 14, No. 2, pp. 5-38.

[英語]

- Smiles, Samuel 1913 *Character*, London: John Murray.
- Smyth, David A. ed. 1987 *The Canon in Southeast Asian Literatures*, Richmond: Curzon Press.
- Statistical Year Book of Siam*, 1922, 1933-35, Bangkok.
- Vella, Walter F. 1978 *Chaiyo! King Vajiravudh and the Development of Thai Nationalism*, Honolulu: The University Press of Hawaii.
- Wyatt, David K. 1982 *Thailand: a Short History*, New Haven: Yale University Press.